

# 手話辞典の使用実態と会話におけるろう者の伝達手法 — 理想的な手話辞典の構築を目指して —

岡田智裕<sup>†1</sup> 坊農真弓<sup>†1 †2</sup>

**概要**：我々が以前実施したインタビューによる意識調査では、ろう者や難聴者、聴者を含む手話話者は分からない手話表現を見た時、隣に聞く相手がいない場合でさえ手話辞典を使わないという結果を得た。また、手話辞典に掲載されている手話表現が、実際の手話表現と異なるために使わない他、その掲載されている手話表現が信頼できないとの回答があった。これらの結果を得て、本発表では、(1)手話辞典の使わない理由について第三者の視点で抽出したキーワードをもとに分析した結果を報告し、(2)手話表現として馴染みのないと思われる食物関連の会話におけるろう者の伝達手法の現状を分析し、手話辞典の現状と問題点について報告するとともに、理想的な手話辞典について考察する。

**キーワード**：ろう者、手話話者、手話辞典、伝達手法、手話会話、マウジング

## 1. はじめに

本研究は、冊子体だけでなくインターネットを含む、理想的な手話辞典[a]の構築を目指すことを最終的な研究目的としている。本発表は、(1) 第三者による視点で手話辞典を使わない理由の抽出と分析(分析 1)、(2)手話会話におけるろう者[b]の伝達手法について分析する(分析 2)という二つの内容で構成される。[1]では、分からない手話表現や初めて見る手話表現があったとき手話話者[c]は、手話辞典を利用しないという結果を得た。インタビューの結果、手話辞典を利用しない理由として「手話学習者が使うもの」や「面倒」等が挙げられた。以上のことから、現在の手話辞典は、手話のある程度学んだ人や手話に日常的に触れている人を対象としていない可能性が浮かび上がってきた。

本節では、[1]で得た結果を再掲し、そこでは触れなかった手話辞典を使わない理由について述べ(1.1 節)、手話辞典の作成目的に関する研究について紹介した上で(1.2 節)、[1]の問題点について述べる。続く 2 節では、手話辞典を使わない理由について客観的に分析するべく文字起こしたテキストを用いた分析手法について述べ、その結果と考察を述べる。エラー! 参照元が見つかりません。節では、手話会話における伝達手法について、分析手法と結果、考察について述べる。4 節では、二つの分析を総合的に考察するとともに理想的な手話辞典の内容や形式について議論する。

### 1.1. 手話辞典を使わない理由

ろう者や難聴者、聴者を含む手話話者は、分からない手話表現や初めて見る手話表現があったとき、どのようにふるまうのであろうか。[1]で筆者らは、手話話者 24 人対

してインタビューを実施し、その際にビデオカメラ PIXPRO SP 360 4K を用いて撮影を行っている。次にその収録した映像を用いて、インタビュー内の発言内容を日本語に文字起こした。そして、分からない手話表現や初めて見る手話表現があったときの行為について、手話話者の回答をもとに分類した。その結果、分からない手話表現や初めて見る手話表現があったとき手話話者は、1 対 1 の時は相手に聞くが、手話による講演や動画の時は、隣に友人がいる時はその友人に聞く(手話話者 24 人中 12 人)が、隣に友人がいない時は、後で相手に聞く(手話話者 24 人中 9 人)、もしくは諦める(手話話者 24 人中 11 人)の 3 パターンのふるまいが観察された(図 1)。インターネット上の手話辞典を含む手話辞典を使わないという結果であった。

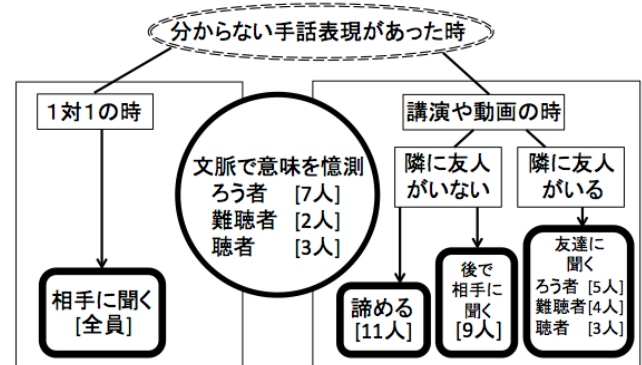


図 1 分からない手話表現があった時の行為([1]より引用)

また、[1]ではインターネット上の手話辞典を含む手話辞典を使わない理由として「手話学習者が使うもの(10 人)」、「面倒(9 人)」が挙げられた。

一方、分からない手話表現があった場合は手話辞典を使わないが、他の理由で手話辞典を使う人が 6 人で、使う理由は以下の通りであった。

- (1) 特定の日本語に対応する手話表現を調べるため
- (2) 国名手話や地名手話の表現を調べるため
- (3) 特定の日本語に対応する新しい手話の表現について目を通すため

<sup>†1</sup> 総合研究大学院大学  
SOKENDAI

<sup>†2</sup> 国立情報学研究所  
National Information Institute

a ここでは手話辞典というときは何の断り書きがない限り、冊子体手話辞典を指すことにする。

b 3 節の分析では「日本手話話し言葉コーパス」のデータを取り扱う上、協力者が全員ろう者であったことから、「手話話者」と「ろう者」と使い分けていることに留意したい。

c ここではろう者、難聴者、聴者を含む、手話を用いる者を手話話者と呼ぶことにする。

これらの理由はまとめると、日本語に対応する手話表現を調べる、あるいは確認するために手話辞典を用いるということである。

## 1.2. 手話辞典の作成目的

1.1 節では、手話話者が手話辞典を使わない理由に「手話学習者が使うもの」が挙げられた。果たして手話辞典は本当に手話学習者のためのものであろうか。1.1 節で触れた手話話者の印象と一致しているのかという問いが浮かび上がってくる。

そこで我々は、日本で広く使われている手話辞典を対象に、手話辞典の作成目的を調べることにした。その結果、全日本ろうあ連盟が1969年から出版している手話辞典は全国的標準手話を普及するだけでなく、手話サークルの学習テキストとして用いられることを目的としている[2]。また、米内山編著の『すぐに使える手話パーフェクト辞典』(ナツメ社 2012)や、田中編著の『カラー版 写真と絵でわかる手話 単語・用語辞典』(東西社 2010)、『写真 手話辞典』(天理時報社 1996)では、冒頭に、手話学習や手話を学ぶ方などと手話学習者のための辞典と明記されている。このことから、手話辞典の作成者の作成目的と、手話話者がもっている手話辞典は手話学習者のためのものという印象は一致するということが確認できた。

## 1.3. ここまでの問題点

1.1 節で紹介したように、本稿の第一著者がインタビュー結果を聴覚障害当事者の視点で分析し、誰もが手話辞典を使わないという結果を得た[1]。そして、手話辞典を使わない理由についても当事者の視点で分析した結果、「手話学習者が使うもの(10人)」や「面倒(9人)」が挙げられた。また、1.2 節では、当事者の視点の妥当性を確認するために、手話辞典の作成目的について調査した。その結果、全日本ろうあ連盟は標準手話の普及を目的に、そして他は手話学習者のために手話辞典を作成していることがうかがえた。

しかし、[1]は、手話辞典を使わない理由について当事者の視点で分析している為、主観的な分析と言わざるを得ない上、偏った結果が出された可能性も否めない。そこで、続く2 節では、当事者ではなく、著者に含まれない第三者に手話辞典を使わない理由をキーワードとして抽出してもらい、それらをキーワードを分類した上で、客観的な視点での手話辞典を使わない理由を明確化することを試みる(分析1)。そして、3 節では手話会話における「食べ物」関連の伝達手法について分析する(分析2)。以上の分析から、現状の手話辞典の問題点や、手話会話における伝達手法について考察する。

## 2. 分析 1

### 2.1. データ

1.3 節で示した問題点を検討するために、本分析では、まず、第三者によるキーワードの抽出を行う。

## 2.2. 方法

先述したインタビュー内容の文字起こしテキストを用いて、その手話辞典を使わない理由を第三者の視点で抽出した。第三者として、日本語だけでなく手話も堪能な手話通訳者(1名)を選出した。

抽出するキーワードは、第三者がなるべく深く考えずに直感的に選ぶことが出来るよう、単語や節、文などの範囲にこだわらないことにした。そして、文字起こしたテキストのそれぞれの協力者の発言の文字数に沿って抽出するキーワードの個数を決めた。協力者の発言量がそれぞれ異なる。そのため、500文字までなら1つ、500文字以上1000文字以下ならば2つ、1000文字以上1500文字以下ならば3つと、500文字ごとに1つ増やす方法とした。その結果、抽出するキーワードの個数と、その個数に該当する人数は以下の通りとなった(表1)。

表1 キーワードの個数と、その個数に該当する人数

抽出するキーワードの個数	該当する人数(合計24人)
1個	19人
2個	4人
3個	1人

その後、抽出したそれぞれのキーワードの対象としているものが人や調べる手法、辞典の内容、辞典の形式手話辞典など、意味が同じ、あるいは似ているキーワードが2つ以上あれば、それらのキーワードを筆者らがグループ化した。

## 2.3. 結果

2.2 節で述べた手法により、キーワードを5つのグループに分けた。そのグループ化したキーワードの中から、意味が同じ単語や文章に絞るとともに個数の情報を記載した(表2)。5つのグループは、それぞれ手話辞典を使わない理由としてのグループで、「手話辞典の利用対象者」「手話辞典以外の方法で実施するから」「手話辞典の内容が不十分だから」「手話辞典の形式が不十分だから」「手話辞典と他の辞典が異なるから」である。

まず、「手話辞典の利用対象者」のグループの回答として、「初心者・入門(者)」という回答(5人)、「聴者」という回答(3人)、「手話通訳者」という回答(2人)、「手話で会話する機会がない人」という回答(1人)が該当した。

次に、「他の方法で実践するから」のグループの回答として、「人に聞く」という回答(6人)が該当した。

また、「内容が不十分だから」のグループの回答として、「手話辞典に載っていないでも通じる事が多い」という回答(1人)、「辞典に載っている手話が通じない」という回答(1人)、「手話辞典を使うことをオススメしない」という回答(1人)、「手話表現がそれぞれ異なる」という回答(2人)、「信頼できる手話辞典がない」という回答(1人)が該当し

た。

そして、「形式が不十分だから」のグループの回答として、「動きが分からない」が2人、「動画がない」という回答(2人)が該当した。

その他、「国語辞典の違いがあるから」のグループの回答として、「手話の場合の国語辞典がない」という回答(1人), 「国語辞典とは別」という回答(1人)が該当した。

最後に、上記の категория に該当しないが、「使う文化がない」という回答(1人), 「音声通訳で意味を判断する」という回答(1人)があった。

表 2 抽出したキーワードのグループ分け

手話辞典の利用対象者		
初心者・入門(者): 5人	聴者: 3人	手話通訳者: 1人
手話で会話する機会がない人: 1人		
手話辞典以外の方法で実施するから		
人に聞く: 6人		
手話辞典の内容が不十分だから		
手話辞典に載っていないが通じる事が多い: 1人	辞典に載っている手話が通じない: 1人	手話辞典を使うことをオススメしない: 1人
手話表現がそれぞれ異なる: 1人	信頼できる手話辞典がない: 1人	
手話辞典の形式が不十分だから		
動きが分からない: 2人	動画がない: 2人	
手話辞典と他の辞典が異なるから		
手話の場合の国語辞典がない: 1人	国語辞典と別: 1人	
その他		
使う文化がない: 1人	音声通訳で意味を判断する: 1人	

2.4. 考察

第三者の視点で抽出したキーワードをもとに分析を行った結果、手話辞典に対する問題点がいくつか浮かび上がってきた。

例えば、「手話辞典の利用対象者」のグループの回答では「ろう者」の回答が一つもなかった他、「手話辞典以外の方法で実施するから」のグループの回答では「人に聞く」という回答しかなかったこと、そして、「手話辞典の内容が不十分だから」のグループの回答では、手話辞典の内容に関して良い評判を受ける回答が一つもなかった事である。

まず、「手話辞典の利用対象者」のグループの回答として、「初心者・入門(者)」という回答が5人、「聴者」という回答が3人であったことと、手話話者はろう者だけでなく、難聴者や聴者、人生の途中で失聴した人(中途失聴者)も含まれることから、少なくとも「初心者・入門(者)」といえ、手話をこれから勉強する人の大半がろう者以外の人、すなわち聴力が軽度の上、発話のみでコミュニケーションを図ることができる難聴者や中途失聴者、聴者であることは想像に難くない。

そして「手話辞典以外の方法で実施するから」グループの回答として、「人に聞く」という回答が6人であったことから、手話表現で分からないことがあれば手話辞典で調べるよりも人に聞いた方が早いという、手話辞典の検索手法のスムーズ性が不十分であることが得られた。

手話辞典と同じ「辞典」のグループに入るであろう国語辞典の使用状況に関する研究[3]では、日本語で分からないことがあったとき、全年齢の回答者全員(174人)のうち、「電子辞書を用いる」が全体の約38%(66人), 「パソコンのネットを使う」が約32%(56人), 「冊子体の国語辞典を使う」が約17%(30人), 「携帯のネットを使う」が約8%(14人), 「友人や知人などに聞く」が約5%(8人)であった(図2)。

[1]と[3]のそれぞれの研究の協力者が異なるため、比較にはならないが、手話の場合、分からない手話表現があった時は人に聞く事のほか、意味を調べるのを諦める事の2パターンしか見られず、手話辞典を使う人はいなかった一方、分からない日本語があった場合は、電子辞書や国語辞典、ネットで調べるのが全体の約95%で、友人や知人などに聞く人が全体の約5%であったという、正反対の傾向があることは興味深い。

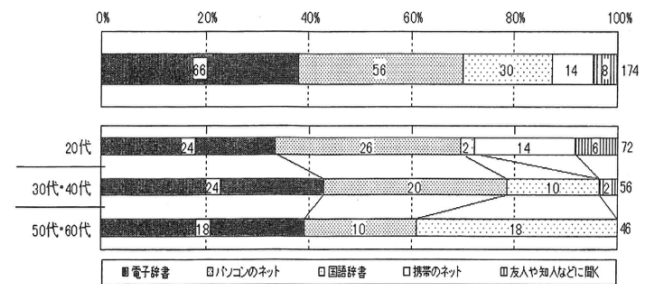


図 2 日本語で分からない事があった時に何をを使うか ([3] p.168 より引用)

2.5. 分析 1 の課題

2 節では、第三者の視点で抽出したキーワードをもとに分析を行った。その結果、現在のインターネットを含む手話辞典は聴者、あるいは手話が分からない人が使うものという見方が少なくともはあることが示唆された。また、手話辞典に掲載されている手話表現はそれぞれ異なる上、手話辞典で調べるよりも人に聞いた方が早く解決するという事も少なくともはあることが示唆された。

表 2 のカテゴリーの「手話表現の内容が不十分だから」に「手話辞典に載っていないが通じる事が多い」に注目したい。ある手話表現が手話辞典に載っていないが意味が通じる事が多いということは、何かしらの方法で解決していると思われる。[1]の筆者の視点で分析した結果では「口の動きで手話表現の意味を掴む」と答えた協力者が2人いた。ここでいう口の動きとはマウジングのことを指すであろう。

おそらく、ある手話表現が手話辞典に載っていないが

意味が通じる背景として、このマウジングが手話会話において伝達手法として機能していると思われる。

### 3. 分析 2

2.3 節で、ある手話表現が手話辞典に載っていないにもかかわらず意味が通じる理由としてマウジングの可能性を示した。そこで3 節では、2 人会話におけるマウジングについて分析するとともに、マウジングの機能や位置づけについて考察する。

#### 3.1. マウジング

マウジング(Mouthing)は音声言語から借用して発展した要素である[4]。[5]はマウジングの頻度に関する研究で、手話会話における口の動き(マウジングと3つのマウスジェスチャー)のうち、イギリス手話では51%が、オランダ手話では39%が、スウェーデン手話では57%がマウジングを産出していた上、どの手話もマウジングが最も多かったと報告している。また、[6]は言い間違え時と言い直したときのマウジングに着目して分析しており、そのマウジングは日本語の音韻リズムに合わせて手話のリズムを作り出している可能性を指摘している。そして、[7]では、手話表現と比べてマウジングの方が、手の動きよりも口の動きが準備する時間を要しないためにマウジングが先行して産出される可能性を述べている。[7]は、手話表現の語彙と、音声言語由来の指文字やマウジングの組み合わせや意味の近い語彙で代替するなどして即興的に対象を表現する方法を「即興手話表現(Improvisational Signing: \*ImS\*)」と定義している。そして、手話相互行為においてマウジングや指文字などの音声日本語由来の表現モダリティが有効に活用されていると指摘している。

#### 3.2. データ

本分析では、「日本手話話し言葉コーパス」に収録されている対話課題データ「我が家のカレーレシピ」を用いた。対象者は長崎県の協力者16名である。「我が家のカレーレシピ」は、自分の家で作るカレーの材料や作り方、オススメのカレーなどについて話し合う内容の対話データである。方法

本分析は、[7]の「我が家のカレーレシピ」において、筆者は、食べ物関連の手話表現を対象に以下の部分に着目した。

##### 3.2.1. 着目する部分

以下の3つのように、いずれかに当てはまるふるまいに着目した。

- 1回では通じず、複数の繰り返し表現があるとき
- 通じていなさそうなふるまいを示すとき(例:眉間にしわを寄せる、沈黙が生じる等)
- 手話辞典に掲載されていない食べ物の手話表現があるとき

この結果、全部で23事例がみられ、短くて1発話で、長くて7発話で構成されている。そして、23事例のそれぞれの発話の合計は66発話となった(表3)。

##### 3.2.2. 書き起こし手法

本研究では、手話会話分析に利用されている[8]の手法で記述することにする。「M:」はマウジング、「PT:」は指差し、「CL:」はCL(Classifier) [d]を意味する。特に指差しにおいては、前方に向けて指差しする場合は「PT:前」と記載し、相手に向けて指差しする場合は「PT:2」と記載する。そして、マウジングで日本語を表している時は一文字

表3 「食べ物」関連の手話表現における伝達手法

性別	年齢	語彙	意思疎通の成功の有無	手話表現の発話												
				1回目	2回目		3回目	4回目	5回目	6回目	7回目					
女	70代	えんどうまめ	成功(?)	A マウジング		A マウジング	CL:手型[F]	A マウジング								
	70代	なすび	成功	B マウジング	CL:棒	A マウジング										
	50-30代	じゃがいも	成功	B マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現									
		人参	成功	A マウジング	手話表現 ※手型[1]	A マウジング	手話表現	B 手型[2]		A マウジング	手話表現	B マウジング	手話表現			
		たまねぎ	成功	A マウジング	手話表現	B マウジング	CL:丸	A マウジング	手話表現							
	果物	成功	B マウジング	手話表現	A マウジング											
	こんにやく	成功	A マウジング	指文字[C]	B マウジング	手話表現										
グリーンピース	成功	A CL:粒		A マウジング	CL:手型[め] 片手	A GL:手型[め] 両手		A 緑(手話表現)		A マウジング	CL:手型[め] 両手					
40代	ビーナッツ	成功	B マウジング		B マウジング	指文字 [びーなつ]	A マウジング	手話表現	B GL:手型[め] 両手		B マウジング	手話表現	B CL:手型[め] 両手			
男	70代	肉	成功	B マウジング	手話表現	A マウジング										
	豆	成功(?)	A マウジング	手話表現	A CL:手型[め]		A マウジング	手話表現								
	トマト	成功(?)	A マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現								
	60-70代	オムライス	成功	A マウジング	CL:精円	B マウジング										
		たまねぎ	成功	B マウジング	CL:丸	A マウジング	手話表現	B マウジング	手話表現	B 手話表現						
		にんにく	成功	B 手話表現		B マウジング	指文字	A マウジング	手話表現	B 手話表現						
	さつまいも	成功	A マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現	A マウジング	指文字 [さつ]	A マウジング	手話表現	B マウジング	手話表現	A マウジング	手話表現
	30-50代	人参	成功	A マウジング	指文字	B マウジング										
		たまねぎ	成功	A マウジング	手話表現	B マウジング	手話表現									
		肉	成功	A マウジング	手話表現	B マウジング	手話表現									
ビーマン		成功	B マウジング	指文字[びー]	A マウジング	指文字[び]	B 指文字[び]									
40代	ビーフ	成功	A マウジング	指文字												
	シチュー	成功	A マウジング	指文字												
40代	ハヤシライス	成功	B マウジング	指文字												

A 画面の右側の協力者 B 画面の左側の協力者

d CL:一般的に、形容詞として働き、手話の調音器官(manual articulator)の特徴的な手型で表し、対象物の特に目立った特徴を描く[9].

ごとに「-」を入れた。例えば、マウジングで「りんご」と表す時は「M:り-ん-ご」と記載する。2つの手話語彙の間には「/」を記述した。そして、間合いがあった場合は(.)で記載する。例えば、1.2秒間の間合いがあった場合は(1.2)と記載する。会話の順番交替や間合いがあった場合、01, 02, 03...と記載した。そして、協力者はNS01, NS02...と記載し、会話の順番の01, 02...と区別した。

### 3.3. 結果

3.2節で述べた2つの手法で取り組んだ結果を以下に述べる。

#### 3.3.1. 伝達手法の結果

表3が分析結果である。分析対象とした合計66発話のうち、マウジングのみ、あるいはマウジングと他の方法(手話表現や指文字, CL)を同時に用いる伝達手法が用いられたのが56発話と全体の約85%であった。そして、マウジングのみの伝達手法が用いられたのが8発話と全体の約12%, マウジングと手話表現の組み合わせの伝達手法が30発話と全体の約45%, マウジングと指文字の組み合わせによる伝達手法が11発話と全体の約17%, マウジングとCLの組み合わせによる伝達手法が7発話と全体の約11%であった。

手話表現については、手話表現のみ、あるいは手話表現とマウジングの組み合わせによる伝達手法が用いられたのが33発話と全体の50%であった。そして、手話表現のみの伝達手法が用いられたのは3発話と全体の約5%であった。

CLについては、CLのみ、あるいはマウジングとCLを同時に用いる伝達手法が12発話と全体の約18%であった。そして、CLのみの伝達手法が用いられたのが5発話と全体の約8%であった。指文字の使用については、指文字のみ、あるいは指文字とマウジングの組み合わせによる伝達手法が用いられたのが12発話と全体の約18%であった。そして、指文字のみの伝達手法が全66発話のうち、1発話(30-50代男性による「ピーマン」の3発話目)と全体の約2%であった。それぞれの組み合わせの伝達手法の発話数を表4にまとめた。

表4 様々な伝達手法の回数とそれぞれ異なる組み合わせ

	マウジング	手話表現	CL	指文字
マウジング	8	30	7	11
手話表現	30	3		
CL	7		5	
指文字	11			1

#### 3.3.2. 会話分析の視点での分析

3.3.1節で、特にマウジングによる伝達手法が目立った会話を1つ取り上げて紹介したい。以下は、長崎\_ID-01-02\_カレー課題(NS\_01-02\_Cur)のデータにおける、カレーレン

ピについて話し合うという題目の断片である。

#### 断片【えんどうまめ】1分46秒520~1分51秒189

断片1はNS02とフィールドワーカーとのやりとりのトランスクリプトである。そして、NS01は、収録現場の進行を担当するフィールドワーカーの方向を向いている。

#### 断片1

---

01 NS02 : たまに/PT:前(M:え-ん-ど-う-ま-め) /  
 02 (0.9)  
 03 NS02 : CL:豆の形(M:え-ん-ど-う-ま-め) / (M:え-ん-ど-う-ま-め) / 入れる

---

01行目で、前方に向けた指差しを産出しながらマウジングで「えんどうまめ」と言う。

0.9秒の間を置いて(02行目), 03行目では、CL表現で、手型[F]で豆の形を示すように表現しながら口形で「えんどうまめ」と言い、その後、そのCLで表現した右手を胸のあたりまで下ろしながら、再度マウジングで「えんどうまめ」と言う。



図3 えんどうまめの表現

### 3.4. 考察

#### 3.4.1. 手話会話における伝達手法

[6]は、日本語は子音と母音がそれぞれひとつずつ、CV(子音+母音)の順序で組み合わせられる音韻構造を持っており、その日本語と頻繁に接触する日本手話会話は、日本語の音声由来のモダリティであるマウジングが効果的に利用される可能性があるとして述べている。本分析においてマウジングの使用率が全体の約85%であったことから、手話会話においてマウジングが意思疎通を図る上で最も効率的な手法であることがうかがえる。

伝達手法として手を用いずに相手に情報を与えるという面では、マウジングが伝達手法の中でも最も効率的な手法である。その一方、発話の1回目にマウジングのみの伝達手法が見られたのは70代女性の「えんどうまめ」と40代女性の「ピーナッツ」と、全23事例中2事例のみであった。このことからマウジングは最も効率的な手法であるが、マウジングのみでは読み取り間違いという不確かさを含んでおり、相手に様々な解釈を与えかねないという可能性も否めない。

そのため、様々な伝達手法のうち最も多かった組み合わせ「マウジング+ $\alpha$  (特に手話表現)」が伝達手法の中でも最も効率的な手法となったであろう。そのことから手話会話においてマウジングは意思疎通を図る上で重要な役割を持つことが示唆された。

### 3.4.2. 「えんどうまめ」の伝達手法

3.3.2節では、「えんどうまめ」に着目して分析した。01行目と03行目の間に0.9秒の間が生じていることから、01行目でフィールドワーカーに伝わらず、03行目で産出しなおしたという風にも読み取れる。これは、01行目ではマウジングのみで試みたが、相手に通じなかった。

次はマウジングだけでなく、右手で「えんどうまめ」の形を表した手型[め]で表現して相手に伝えようと試み、再度マウジングを産出している。おそらくNS02は「えんどうまめ」の手話表現を知らなかった、あるいはまだ正式な手話表現が存在しないために、豆の形を表した手型[め]で表さざるを得ない状況になったと考えられる。最後に03行目では「えんどうまめ」をマウジングのみでなされているが、03行目の後、映像ではフィールドワーカーが映っていないことからフィールドワーカーの反応を汲み取ることができない。しかし、NS02は03行目の発話の後、カレー作りの話に戻っていることから、フィールドワーカーに「えんどうまめ」が伝わったように読み取れる。

ただ、フィールドワーカーの行為は映像からは確認できないため、フィールドワーカーが「えんどうまめ」と理解できたかどうかは不明である。

01行目から03行目の間で分かることは、3発話全てマウジングを用いており、そのうち2発話がマウジングのみで、残りの1発話がマウジングとCLの組み合わせによる伝達手法であったことである。

NS02は「えんどうまめ」の手話表現を知らない事に対する証拠に、全日本ろうあ連盟が出版している手話辞典『わたしたちの手話学習辞典』(2010)や『新日本語-手話辞典』(2011)、新たな手話を掲載している『私たちの手話 新しい手話2004-2016』には「えんどうまめ」の手話語彙が掲載されていない。

## 4. 総合考察

分析1では、第三者によって抽出されたキーワードを分類した結果から、現在のインターネットを含む手話辞典は、(1)辞典で調べるよりも「人に聞く」方が早い事と、(2)手話辞典と同じ辞典のグループに含まれるであろう「国語辞典」は人に聞く割合が約5%と、手話辞典の逆の結果が得られた。

分からない手話表現があった場合は「人に聞く」が大半であった一方、分からない日本語があった場合は「人に聞く」方法が約5%[3]でその他は冊子体やインターネット、電子辞書の国語辞典を用いるという、手話とは正反対の振

る舞いであった。このことは検索のスムーズ性が不十分ということを示している。おそらく、現在のインターネットを含む手話辞典が日本語から検索する手法が主流であることから手話話者は、分からない手話表現があった場合、手話辞典で調べる事が困難であることが想像できる。このことは、手話の構成要素から検索できる上、スムーズに検索できる手法であれば、手話話者は手話辞典で調べるようになるという可能性を示している。

分析2では、「食べ物」関連の伝達手法の結果から、「食べ物」関連の手話表現が確立されていない手話会話において、意思疎通を図る際にマウジングを活用していることが読み取れたほか、会話分析の視点での分析でも、マウジングが活用されていることが読み取れた。このことから、マウジングは手話会話における伝達手法として重要な位置づけとなっていることが示唆された。

では、分析1の結果から、スムーズに検索できる上、手話表現を十分に収録した、動画付きの手話辞典ならば、手話話者はその手話辞典を用いたいと思うのだろうか。また、分析2の結果から、手話辞典に手話表現を掲載する際に、手話会話において重要な役割を持つマウジングの付与も必要なのだろうか。この2点については今後の課題としたい。

## 5. おわりに

以上、本研究では、次の2つの分析に取り組んで分析を行った。分析1では、手話辞典を使わない理由について、第三者による視点で抽出したキーワードを分類した。次に分析2では、手話会話上でやり取りされる「食べ物」関連について、ろう者の伝達手法について分析した。

その結果、インタビューの協力者24人は、現在のインターネットを含む手話辞典は、少なくとも手話学習者向けで、分からないことがあれば人に聞いた方が良い事が示唆された。そして、分析1の結果の「手話辞典に載ってなくても通じる事が多い」に着目して分析に取り組んだ。その結果、手話語彙として確立されていない手話表現のやり取りにおいてマウジングが重要な役割を持っていることが確認された。このことから、ろう者は手話会話において、マウジングの活用が意思疎通を図る上で重要な役割を持つことが示唆された。

今後は、スムーズに検索できる上、手話表現を十分に収録した、動画付きの手話辞典の評価を行うとともに、手話会話におけるマウジングの位置づけを更に明確化することを目指したい。

### 謝辞

本研究は科学研究費助成事業若手研究(A)(研究課題番号:26704005)および国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)(研究課題番号:15KK0068)「手話相互行為分析のための言語記述手法の提案」(代表:坊農真弓)によって支援

された。本原稿は手話話者 24 人のインタビューの文字起こしたテキストと「日本手話話し言葉コーパス」の長崎県の協力者 16 人のデータを用いた。ここで感謝を述べたい。ただし本稿の認識の誤りがあれば全て執筆者の責任である。

## 参考文献

- [1] 岡田智裕, 牧野遼作, 坊農真弓, (2016) “手話コミュニティにおける語の社会的な役割についての意識調査,” 情報処理学会研究報告, No. 8, pp.1-6.
- [2] 高田英一, (2013) 手話からみた言語の起源. 文理閣.
- [3] 秋山智美, (2012) “国語辞書の使用状況とことばの意識,” 東京交通短期大学 研究紀要, Vol.17, pp.167-17.
- [4] W. Sandler and D. Lillo-Martin, (2006) “Sign Language and Linguistic Universals,” CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS, pp.104-105.
- [5] O. Crasborn, E. van der Kooij, D. Waters, B. Woll, and J. Mesch, (2008) “Frequency distribution and spreading behavior of different types of mouth actions in three sign languages,” *Sign Lang. Linguist.*, Vol.11(1), pp.45-67.
- [6] 坊農真弓, (2009) “日本手話会話におけるマウジングと言い直し,” 電子情報通信学会技術研究報告, Vol.109(259), pp.13-18.
- [7] 坊農真弓, (印刷中) “手話相互行為における即興手話表現:修復の連鎖の観点から,” 社会言語科学会, Vol.19(2).
- [8] 菊地浩平, 坊農真弓, (2013) “相互行為における手話発話を記述するための アノテーション手法および文字化手法の提案,” 手話学研究, Vol.22, pp.37-63.
- [9] I. Zwitserlood, (2012) “Classifiers,” in *Sign Language An International Handbook*, R. Pfau, M. Steinbach, and B. Woll, Eds. DE GRUYTER, pp.158-186.